

第三節 地形と遺跡の分布の関係

一 旧石器時代

豊津町付近では、旧石器時代の遺跡の分布は多くない。豊津町北方の行橋市鬼熊遺跡では弥生・古墳・中世の各時代の遺物とともに旧石器時代の石器が出土した。豊津町長養池遺跡は長養池畔からナイフ型石器などが採集され、旧石器時代後期・晩期の遺跡と推定されている。このうち、長養池遺跡は高位段丘面の開析谷の谷壁緩斜面に当たり、開析谷自体が小規模であることから、存在の可能性は問題がない。鬼熊遺跡については、河道跡に挟まれ、それより二、三メートル程度高位にある、自然堤防状の地形上に位置している。この位置は低位段丘面上ではなく、沖積面上であることから、陸化の時期が不明である。しかし、低位段丘面が埋積されずに残っている可能性もあり、更なる検討が必要である。

二 縄文時代

豊津町の縄文時代の遺跡は、尾花原遺跡、台ヶ原遺跡、節丸西遺跡の三遺跡である。尾花原遺跡は、高位

段丘面の末端部にある遺跡である。台ヶ原遺跡は、豊津町主部の位置する高位段丘面としての豊津扇状地の最も上流側に位置する。節丸西遺跡は、節丸北西方の沖積面に位置する縄文時代後期の集落遺跡で、ほかの時代・時期の遺構や擾乱などがほとんどなく当時の姿をかなり良好に残している遺跡といえる（豊津町教育委員会、一九九〇）。節丸西遺跡の立地点は沖積面の中でも、祓川の旧河道に挟まれた自然堤防上にあり、縄文時代後期以降、この地点は陸化して高燥な状態であったことを示している。

三 弥生時代

豊津町における弥生時代の遺跡は、『豊津町誌』（一九八五）に詳細に記載されている。荒谷池遺跡、大正池遺跡、台ヶ原遺跡、巢鳥池遺跡、豊津高校庭遺跡、新村ノ上遺跡、川ノ上遺跡、下原遺跡、上原遺跡がある。

このうち、下原遺跡は低位段丘面上、川ノ上遺跡と上原遺跡は中位段丘面上、荒谷池遺跡、台ヶ原遺跡、豊津高校庭遺跡は高位段丘面上、新村ノ上遺跡、浦ノ谷池遺跡は花崗岩からなる丘陵地に位置している。消滅した遺跡も含めて若山遺跡、長養池底遺跡、荒谷池遺跡の池底部、頭無池遺跡、大正池遺跡、巢鳥池遺跡は、いずれもより高位の地形を開析する開析谷の谷底から谷壁緩斜面にかけてみられる遺跡で、これらは湧水や谷底部の谷川の存在が、集落の立地を規定しているものと考えられる。